

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

マヤ興亡：文明の盛衰は何を語るか？

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5663

第五章

激動の時代

——後古典期からスペイン人の征服期

低地南部で栄えたマヤ文明は滅んでしまった。しかしここで強調しておかなければならないのは、決して忽然とマヤ文明は消え去ったのではないし、人々もこの地から消えて無人のジャングルと化したのではないことである。人々はペテン・イツァ湖を中心に以後も住み続けたのである。とはいえ、それらの遺跡は、古典期に栄えた遺跡の規模には達しなかつたし、また、後古典期に栄えた北部のユカタン半島の諸都市には比べるべくもない。つまり、以前とは異なつた組織の社会が、わずかに生き延びていたにすぎないということになる。

以前の研究では、マヤ文明の崩壊は、貴族層に大きなダメージをあたえたが、一般民衆は、単に崩壊をこうむつた中心地からはなれたにすぎないと仮定されたことがあつた。しかし、テクサルをはじめとする住居址の研究から、人口は古典期末期に、急激に減少したと考えられるようになっている。

後古典期に人々が住み続けた地域は限られている。ペテン・イツァ湖を中心とする、ペテン中心部の東西に点々とある湖から、東のベリーズにいたる地域である。ペテン地域では、湖の島や半島がもつとも人口の集中したところである。彼らはおもに湖に点在する島や突き出た半島に居住し、湖の周辺部から奥地にいたると、ほとんど居住しなかつた。サルベテン湖のサク

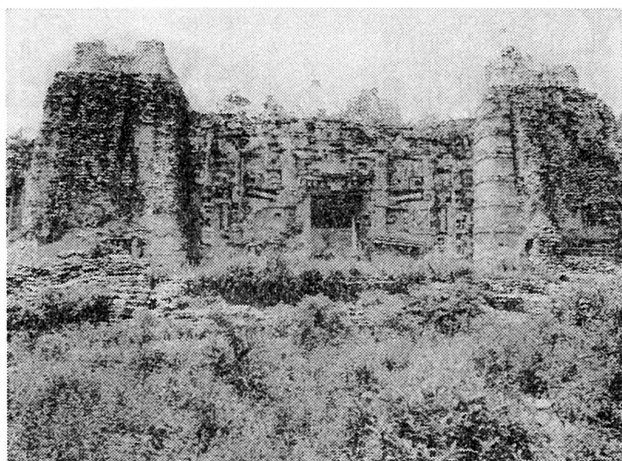
ペテン半島では一平方キロに八一九の建物があるという高密度であるが、規模が小さい。さらに東のベリーズのバルトン・ラミーでは、古典期の絶頂時の五八%の人口があり、中央部より多く人が住んでいたと推定されている。ベリーズでは、そのほかノフムルやラマナイなど、いくつかの遺跡で、後古典期の遺物や建物が発見されている。

ティカルでさえ、わずかながらも人が住んでいた証拠がみつかっている。建物のなかや階段に、後古典期の土器や香を焚いた証拠がある。しかし規模は小さく、ほんの少しの家族が住んでいたにすぎない。おそらく、中心部が放棄されたあとにやって来た数家族が住んだ跡ではないかと思われる。同じように、これまで調査されてきたアルタル・デ・サクリフィシオスやワシヤクトウン、パレンケなどでも状況は同じである。

後古典期前期（九〇〇年～二二〇〇年）

低地南部で栄えた文明は、八〇〇年から九〇〇年にかけて、おそらく地域ごとに少しずつ違った原因により滅んだと思われる。中央部の湖の島や半島にあるタヤサルやトポシユテや、そこから東のベリーズにかけてはひきつづき占住されるが、低地南部の都市はほとんど放棄されてしまった。

しかし低地北部は、その後も栄えた。北部も、南部と同じようにスワジー式土器時代から活動のあとをたどることができ、古典期には石碑も建てられるが、そのころまでは南部とかわる



写7 オルミゲーロの遺跡(リオ・ベック式建築)

ところがなかった。むしろ周辺地域にすぎなかったといったほうがいい。しかし、少しずつ独自の特色を強め始める。

六〇〇年頃には、リオ・ベック式やチェネス式とよばれている特徴ある建築が、中央ユカタン地方で建てられた。そして八〇〇年頃には、プウク式建築が、ウシュマルやカパーを中心に勃興した。

リオ・ベックの中心は、リオ・ベック、シュピル、オルミゲーロなどが挙げられるが、建築の特徴としては、昇ることのできない急勾配の階段の頂上に、機能を果たさない神殿をつけた擬似ピラミッドと、低い建物を結合させたものである。

チェネス式の特徴は、建物の入り口を怪物の口でかたどったもので、正面は石をモザイク状にして飾っている。そしてそれは普通しつこい

でおおわれている。

プウク式といわれる建築様式は、ウシュマルやカバーを中心として広がっているが、セメント状に固めた土砂や小石を核にして、その表面を薄いベニヤ状の石灰岩板で張ったもので、建物の正面は石のモザイク模様で飾られている。普通下部は無装飾で、上部のみ装飾が施されているが、カバーのコッツ・ポップのように、全面を石の彫刻物で飾った建物もみられる。南部の建築様式は、ブロック状の石を積み重ねるもので、プウク様式と著しい違いをみせているが、マヤ式のアーチも南部の平石を積み上げて作る方法と異なり、長靴状の石で作られている。

九〇〇年から一二〇〇年は、チチェン・イツアを中心とするトルテカⅡマヤ時代と名づけられている。後古典期前期である。土器の分析からは、これまでプウク時代はケフペツチ土器、チチェン時代はソトゥタ土器という区分がされてきた。そしてチチェン時代は、九〇〇年または一〇〇〇年頃から一二〇〇〇年頃までとされてきた。時代的には、プウクのあとにトルテカⅡマヤがくるといわれてきたのである。しかし最近、両者は一部時代的に重なりあうとみられるようになってきた。

チチェン・イツアは観光地として名高く、なじみの深い遺跡である。遺跡は新チチェンと旧チチェンとよばれる建物群に分かれており、旧チチェンはプウク時代、新チチェンはトルテカⅡマヤ時代とされているが、それぞれの建物がいつの時代に属するかということをはじめ、トルテカとマヤの関係、この時代はどのような時代であったかといった中味は意外と知られてい

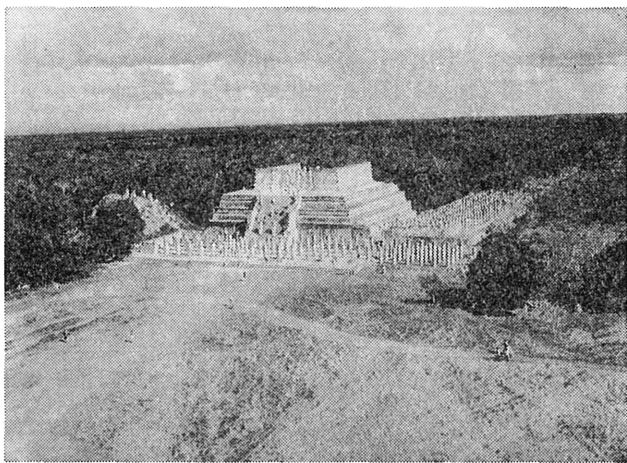
ない。チチェン・イツアの遺跡の層位研究が十分に行なわれなかったことに加え、その時代に栄えた遺跡がほかにほとんど発見されていないからである。そこで、まだまだわからないことだらけなのであるが、この時代の問題点をいくつか挙げることで、後古典期前期という時代を説明することにした。

まずいつごろから後古典期ははじまったかについては、チチェン・イツアの貿易港とみられているイスラ・セリットと呼ばれるユカタン北海岸にある小さな島のデータがある。一九八四、八五年に調査されたこの土器の分析から、ケフペツチ期の土器複合とソトゥタ土器が、一部重なりあうことが知られるようになった。そこを調査した学者の年代区分によると、ケフペツチは七〇〇年から九〇〇年、ソトゥタは八五〇年から一一五〇年ないし一二〇〇年というが、ここではプウク時代を八〇〇年から一〇〇〇年におく説を採用する。この説でも、その発見を無視することにはならない。ソトゥタを九〇〇年から一二〇〇年に設定すれば、両者は一部重なるからである。ペト・クリム土器を代表とするソトゥタ時代に属するイスラ・セリットの放射性炭素年代測定値も、九〇三年から一一五二年の値を示している。同時代のデータはチチェン・イツア近くの洞窟バラカンチェのものしかないが、その四つのデータも九二七年から一〇二〇年であり、ソトゥタ時代は、九〇〇年頃に始まるとして問題ない。

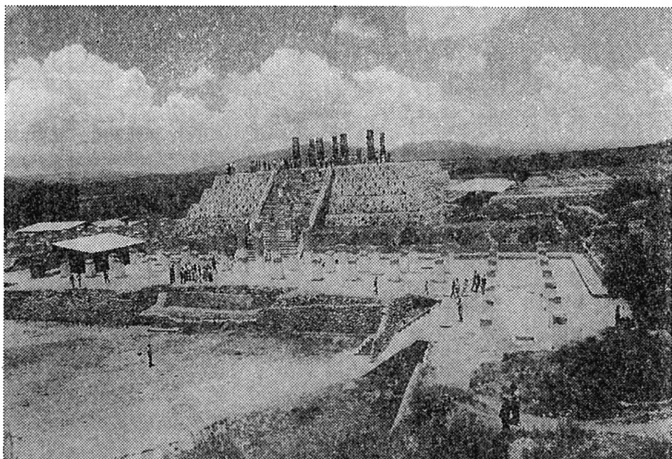
チチェンには暦をもつ石彫りがいくつかある。もつともあてになるのは、「イニシャル・シリーズの石碑」といわれるもので、一〇・二・九・一・九 九ムルック 七サククという長期

曆を刻んだものである。これは八七八年に当たる。そのほかカレンダー・ラウンドでのみ記した日付がたくさんあるが、それらはいずれも、その前後に集中している。これらの石彫群はブウク式の建物にあるので、八五〇年という年代設定は早すぎるということになる。やはり九〇〇年という時代設定は妥当ということになる。むしろそれでも早いくらいといえよう。

時代設定と密接に関係するのが、トルテカ問題である。チチェン・イツアの遺跡はメキシコ高原のトゥーラと驚くほど似ている。戦士の像、蛇をかたどった柱、アトランテとよばれる両手を挙げている像、列柱建築、傾斜壁、壁面装飾、頭を立てて顔を横に向け、あおむけに寝て膝を立てている、チャックモールと呼ばれる像、羽毛の蛇の神話など、たくさんの特徴を共有する。両者の密接な関係は疑うべくもないが、しかしどちらから影響があったのかについては二説ある。メキシコとマヤに伝わる羽毛の蛇の神話からは、トゥーラからチチェン・イツアへ文化の移入は行なわれたと考えられる。しかし、建築や美術の最近の研究からは、チチェン・イツアからトゥーラへ伝わっていったといわれるようになってきた。ユカタン半島は石灰岩でできた地帯で、考古学的な層位が残りにくいいため、年代関係がはっきりしないことが混乱の大きな原因となっている。たとえば球戯場の建設年代一つをとりあげても、七世紀という人もいれば、十一世紀と主張する人もいるし、十三世紀とする人もいて、一致しない。最近それは十世紀頃建造されたという意見が有力になってきたが、まだ研究の余地がある。このような問題があるけれども、チチェン・イツアがトゥーラとの交流により、力をえて、ユカタンを支配し



写 8 チチェン・イツァの「戰士の神殿」



写 9 トウーラの「神殿B」

たことはまちがいない。

産地の同定しやすいものに黒曜石がある。イスラ・セリットの発掘でみつかった黒曜石の約八二%が、メキシコ中央高原のパチュカとウカレオから伝来したものであり、これはトゥーラの黒曜石の産地パターンとよく似ている。これまでのグアテマラ高地のチャルやイシユテペケなどの黒曜石から、メキシコ高原に調達産地をかえたのである。この時代のメキシコ中央高原の黒曜石は、トゥーラの支配下にあつたとみられており、イツアはトルテカとの交易を維持したことがうかがわれる。チチェン・イツアが崩壊後、この交易路も崩壊したらしく、黒曜石はふたたびグアテマラ高原から得られるようになる。これからは、トゥーラからチチェンへの影響とみることができる。建築や美術の研究による両者の関係は、どちらがよく発展しているかに基礎を置いており、チチェンのほうが優れていることは確かであるが、トゥーラを退廃とみれば、チチェンからトゥーラへの影響となり、チチェンを発展とみれば、トゥーラからチチェンの道が考えられるのである。

トゥーラとの関係でもうひとつ気になることがある。それはマヤに入ってきたナワ系の言葉が、いずれもナワトル語ではなく、ナワツト語の語形であることに對してである。たとえば、第二章でふれたように、ナワトル語では羽毛の蛇をケツアルコアトルというが、伝承に残る形は、ケツアルコアットまたはケツアルクアットという具合に、*tl*が*tl*に変化した言葉なのである。*tl*から*tl*に変化したナワツト語は、タバスコ州近辺で現在も話されている。このことから、

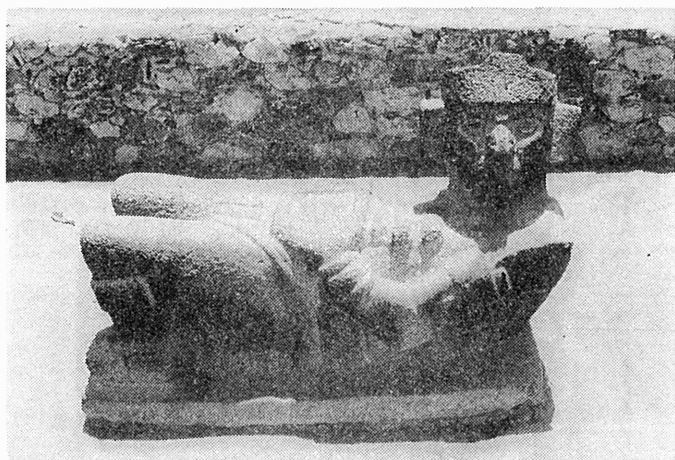
ユカタンにおける影響は、メキシコ高原から直接受けたのではなく、タバスコあたりから受けたと推測されるのである。これは九世紀以後タバスコ州辺りに住んでいたチヨンタル人が海上交易の支配権を握ったという歴史資料から得られた考えと一致する。チヨンタル人とは誰なのか、現在のところマヤ系という意見が有力であるが、実際は確かめようがない。もしも彼らがナワット人であるとする、借用語から、言語学的にも納得できることになる。ところが一つ問題になることがある。tl言語はもとtl言語であり、あるときtlに変え、ふたたびtlにした言語があったと比較言語学から推定されているところから、問題が複雑になってくる。トルテカ人がtl言語の人であったか、それともtl言語の人であったかわからないし、ナワ人であったかさえ確証はまだ得られていないのである。

ユカテク語やキチエ語などにみられるナワット語からの借用語は、後古典期後期の可能性もある。ランダは、ケサルクアティが西の方から到来したが、イツァ族より前に来たのか、後に来たのか、あるいは一緒に来たのかについては、意見が分かれており、確かでない」と記しているし、トゥーラから来たという伝承をもつキチエ族らは、十四世紀にグアテマラで主権が確立したからである。

この問題は言語からみる歴史という点から、とてもおもしろいのであるが、論じるにはまだ資料不足であり、これ以上は触れることはできない。しかし、少なくともタバスコ辺りにトルテカ問題を解く鍵が隠されていると思うのである。



写10 チチェン・イツアのチャクモール



写11 トウーラのチャクモール

羽毛の蛇の神話は、たいへんおもしろいものである。しかし羽毛の蛇は、遠くオルメカの時代から登場するし、マヤでも、古典期前期の土器によく現われる。コパンでは八世紀、遺跡の中央に羽毛の蛇の彫刻が飾られている。さらに最近発掘が進んでいる有名な階段碑文の頂上にある神殿には、プウク地方でみられる曲がり鼻のチャクと呼びならわしている彫刻が、神殿の四方の角に飾られている。キリグアでも、チチェンにみられるチャクモールが発見されていることを付け加えると、南東部のキリグアやコパンがもう一つの鍵を握っているといつてよいであらう。

後古典期後期（一二五〇年～一五四二年）

繁栄を誇ったチチェン・イツァも、マヤパンのフナツク・ケエルにより滅ぼされてしまった。年代記によると、チチェン・イツァは十三世紀に崩壊した。その後はマヤパンが主権を握った。イサマルの王がチチェンの王の妻をかどわかしたその結果としておこった戦いで、マヤパンのフナツク・ケエルがチチェンを征服したという。

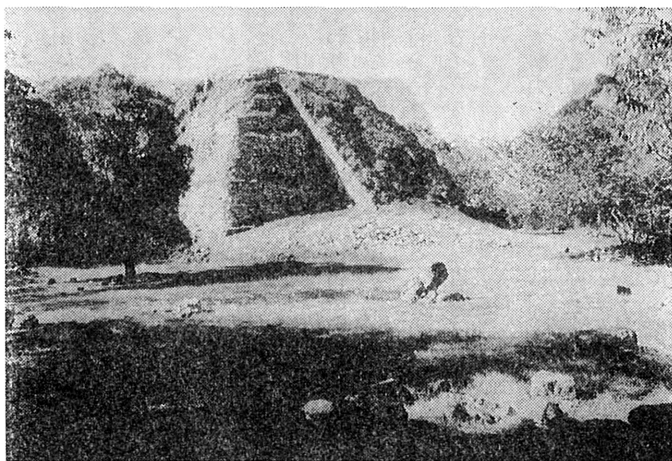
チチェンが襲われたことは、考古学的にも裏付けられる。戦士の神殿の発掘で彫刻物は故意に壊され、奉納物は盗まれていた。

フナツク・ケエルはメキシコの傭兵を導き入れたのち、マヤパンの王もタバスコから傭兵を受け入れたが、ユカタンにおけるメキシコとの接触は考古学的にも文書からも確かめられる。

第五章 激動の時代——後古典期からスペイン人の征服期



写12 チチェン・イツアの「カスティリヨ(城)」



写13 マヤパンの「カスティリヨ(城)」

後古典期前期のチチェンでは、鉛様の光沢をもつ土器Plumbateをはじめとする輸入土器がみられるが、マヤパンの下層からも同様の土器がみられる。チチェンの放棄後は新しい添加物はいった土器が導入される。マヤパン建設後は、新しいスリップカラーの土器が現われる。これらの土器のデータは、チチェンの放棄とマヤパンの建設が一部重なることを示している。これらの変化は、激しい襲撃があつたにもかかわらず、チチェンが徐々に放棄されたことを示しているようである。

マヤパンには、ココム家を中心に、各地の首長達が壁内に住んでいた。チチェン・イツアのカステイリヨ(城)を真似た建物が中心にそびえる。中心地には一二〇ほどの建物があり、そのまわりをエリート層の住居が囲み、さらにそのまわりには、一般人の住居があつた。四平方キロの中に、約四千もの建物があり、約一万の人が住んでいたといわれる。

グアテマラ高地は、この時代になって、やっと注目を浴びるようになる。キチェ族やカクチケル族の残した年代記に、王朝の歴史が書かれている。そうした歴史と、考古学の発掘調査がよく一致するのである。

スペイン人が征服にやって来たとき、グアテマラで勢力を誇っていたのは、キチェ族やカクチケル族など、現在でもグアテマラ高地で生活している部族であつた。考古学的に調査されているのは、キチェ族のグマルカフ(ウタトラン)、カクチケル族のイシムチエ、ポコマム族のミシユコ・ビエホ、マム族の遺跡といわれるサクレウなどである。それ以前に栄えた遺跡も、カ

ミナルフユ、サクアルバ、ネバフなどの一九三〇、四〇年代までに調査された遺跡に加え、近年発掘が行なわれるようになってきた遺跡がたくさんある。なかでもエル・ポルトウンやサカフットなど、マヤ文明を考えるうえで、大変重要な遺跡が明らかになりつつある。

年代記など、征服後に書かれた資料によると、キチエ族やカクチケル族は、タバスコ州あたりのメキシコ湾岸地帯から、一二〇〇年以後にやって来たといわれる。彼ら好戦的な人々は、トゥーラの子孫と名乗っており、いわゆるメキシコ的な特徴をみせるプトウン・マヤの一派である可能性が強い。

さて、十五世紀になると、ユカタンで主権を誇っていたマヤパンも、滅んでしまう。ココム家の継承者の中に傲慢な男がいて、タバスコやシカラングの者たちと同盟を結び、メキシコ人を町へ導き入れ、暴政を奮い、貧者を奴隷にしたので、首長たちは、トゥトゥル・シウのもとに結束し、ちょうど不在であった一人を除いてココム家を滅ぼしてしまった。そうして、マヤパンは放棄された。それは八アハウ・カトゥンのことであった。

マヤパン崩壊後、チエル族はテコフに居を構えた。ココム族はソトゥタの近くのティブロンに、シウ族はマニを建てた。

マヤパンが滅んだあと、スペイン人の征服までのあいだの約百年は、混乱をきわめた時代であった。ハリケーンの襲来、熱病、争乱、そのあとまた膿のである疫病がマヤ人たちを襲った。ランダの記述をもとに、それらの年を記すと、一四四一年のマヤパンの崩壊後、「二〇年以上

にわたって、豊作や健康に恵まれていた。人口もまるでこの全地域が一つの村になったかと思われるほど増加した」。

マヤパンが崩壊後、二十二年ないし二十三年後、おそらく一四六四年に、ハリケーンがやって来て、大きな被害を出している。「この幸運ののち、冬のある夜の午後六時頃、一陣の風が吹き始め、それは次第に強くなり、やがて四方から吹きあれるハリケーンとなった……ハリケーンは翌日の正午まで続いた」。

その後「十六年間にわたり健康にも天候にも恵まれた」。

一四八〇年になると、「この最後の年はきわめて実り多い年だったのに、収穫を始めようとしたとき、突如として全土に熱病が蔓延した。この熱病は二十四時間続き、それが過ぎると、病人の体は腫れ上がり、うじ虫が湧き出して、多数の人々がこの疫病で死んでしまい、収穫もほとんど取り入れることができなかつた」。

「疫病がおさまつてのちの十六年間はこれまた恵まれた年月が続いた」。しかし一四九六年、「ふたたび内輪もめや派閥争いが起こり、その争乱によつて十五万人が死亡した」。「この殺し合いがすんでからはお互いに和睦し、二十年間にわたつて平和と休息の時が続いた」。

一五一五年または一六年、「膿のでる疫病が襲つた。体が悪臭を發して腐り始め、四、五日間で手足が崩れ落ちていった」。

一五〇二年にコロンプスが四回目の航海のとき、ホンジュラス湾のベイ島の近くで、おそら

くマヤの商人と思われる一団と遭遇している。

一五〇八年は、ユカタンの大部分が公式に発見された年である。一五一三年には、フアン・ボンセ・デ・レオンが、フロリダからの帰国の途中にユカタンに寄っている。この時天然痘がもたらされたという説がある。一五一五年から一六年にかけて流行したという疫病は、天然痘かもしれない。

一五一七年には、エルナンデス・コルドバが、翌年には、グリハルバがユカタンを探検している。そして一五一九年には、アステカ文明を滅ぼすことになるコルテスがコスメル島に上陸し、いよいよ征服の時代が始まった。

コルテスは、島の住民から、スペイン人がすでにいる情報を得た。それは、一五一一年、現在のパナマのダリエンからサント・ドミンゴへむけて出帆した船が、ジャマイカの近くのロス・アラクラネスの浅瀬で座礁沈没した時の生き残りであった。十八人（うち女二人）が帆も食糧もないボートで十四日間漂流している間に七人死亡した。ユカタンに着いた人のうち、隊長のバルディビアほか四名が犠牲になった。残り七人は檻にいれられ、人身御供のため太らされている間に逃亡し、敵対する隣国の保護をもとめたが、奴隷となり、二人をのぞき死亡した。生き残ったグレーロは、チェトマルの王ナチャン・カンに仕え、結婚して三人の子供があり、顔には入れ墨をし、両耳と下唇には穴を開けていたという。おそらく彼が最初の混血児メステイソを生んだ親であろう。一五三六年ホンジュラスで死亡したと伝えられる。もう一人の生き

残りアギラールの方は、コルテスに仕えることになり、コルテスのアステカ帝国の征服に寄与した。

マヤの地、ユカタン地方を征服したのは、モンテホ父子であり、グアテマラを征服したのは、ペドロ・アルバラードであった。

モンテホは一五一四年アメリカ大陸にやって来て、グリハルバやコルテスの探検隊に参加したあと、一五二六年、時のスペイン王カルロスにユカタン地方の征服、植民を願ひ出て、許可を得、翌年セビリヤからコスメル島にやって来た。コスメル島の対岸に最初の町サラマンカを建設した後、内陸部に侵攻した。

一五三一年から三五年にかけては、今度は西から、征服の試みを企てた。一五四〇年から四六年に行なわれた征服は、モンテホの息子のほうで、一五四二年一月六日、メリダ建設で、一応は、征服は完了した。

グアテマラの征服は、一五二三年から二四年にかけてのアルバラードの遠征で、完了した。一五二四年七月二十五日、カクチケルの居城であったイシムチェに首都を定める。

しかし、征服は、完了したといったものの、反乱はしばらく続いた。ユカタンでは、一五四六年クプルを中心とする反乱がおこり、バリヤドリッドが主な攻撃目標となったし、グアテマラでは、一五二七年にカクチケルの反乱がおこり、シウダー・ピエハに遷都することになった。十四年後、火山の地すべりにより破壊され、アンティグア・グアテマラに首都を移した。

ランダによると、「バリャドリッドのインディオたちは、昔からの悪習のせいか、あるいはスペイン人の扱いがあまりにも酷だったからか、スペイン人が貢物を取り立てるために各地に散らばって行ったときを狙って彼らを殺害することを企てた。そして一日で、十七名のスペイン人と、殺されたり生き残りたりしたスペイン人に使われていた四百名の者を殺して、その腕と脚を戦果の印として各地に送り、同胞の決起をうながした。これは結局実現しなかったから、アデラントード（モンテホ）も、このバリャドリッドにあつたスペイン人を救援にやってくることができたし、インディオたちを懲罰することもできたのであつた」。

一五三六年、シウ族のアフ・ツン・シウは、チチェン・イツァに人身御供を捧げに行こうとして、ココムの領土の通過をココムの首長ナチ・ココムにもとめた。スペイン人は一五二七年と一五三一年から三五年をのぞくと、ユカタンから撤退していた。

ナチ・ココムはシウの依頼を快く受け入れた振りをし、祖父の祖父アフ・シュパン・シウがマヤバンで犯した裏切りを忘れず復讐の機会とした。トゥトゥル・シウ家のアフ・ツン・シウの曾祖父アフ・シュパン・シウは、ナチ・ココムの祖父を虐殺していた。その仕返しをオツマルで果たした。アフ・ツン・シウ、息子のアフ・シヤン・シウをはじめ、四十人あまりのシウ家の指導者たちが、四日間のもてなしの最後の夜に皆殺しにされた。

ランダによると、「スペイン人がユカタンを去つてのち（一五三五年）、この地方には早魃が続いた。そのうえスペイン人との戦いでトゥモロコシを無秩序に消費してしまつたので、非常

な飢饉が彼らを襲った。住民は遂に木の皮、特にクムチェと呼ばれる中がふわふわしていてやわらかい木の皮を食べるに至ったが、この飢饉で、マニの首長であったシウ家では、チチェニサの池に奴隷の男女を投じて莊嚴な供犠を行なうことを取りきめた。しかしそのためには、彼らの宿敵であるココム家の領内にある集落を通過しなければならなかった。彼らはこうした時期に宿怨を再燃させることを恐れて、ココム家に対して集落を通過させてくれるようにと懇願した。これに対してココム家は快諾の返事を与えて彼らを欺き、一軒の大きな家に彼ら全員を宿泊させた上でその家に火をつけ、逃げ出す者を殺してしまった。その結果大変な戦いとなったが、それに加えて、五年間にわたりイナゴの害が発生し、緑の色のあるものはことごとく食いつくされてしまったために、住民は路傍に餓死するという状態となった。イナゴの害の後四年間はやや恵まれ、事態は幾分改善されたとはいうものの、スペイン人が再びこの地に到着した時には、この地は全く見違えるほどの様相を呈していた。

一五四〇年スペイン人が再度征服にやってきたとき、シウはスペイン人に恭順を誓ったのに対し、ココムは反抗した。

スペイン人がユカタンにやってきた十六世紀の初頭には、ユカタンは、多くの政治的単位、クチカバルと呼ばれる自律的な州に分かれていた。ユカタンの人々は共通の文化をもっていたが、各地域の社会政治的組織や資源はかなり異なっていた。そのため州間で争いがたえなかった。スペイン人は、州間の争いを利用して征服を容易にしえたが、同時に土着の伝統的な政治

権威が植民地化の障害となった。多くの政治的単位に分かれていたことは、ユカタンの征服、植民地化のためには有利であったとともに、障害ともなったのである。

政治的な分化はかなり古くから存在したようである。マヤパンの崩壊の一四四一年頃にさかのぼることははっきりしている。マヤパンは北西のいくつかの州の集合政治体系であった。しかし東南の州は含まれず、独立した州であった。マヤパン建設以前の十二世紀中葉にもすでに多くの州があったことはほぼぼまちがいのないようである。

征服以前の北部マヤ地域の政治形態については、かなり古くから興味をもたれてきた。しかし、それぞれの州がどのような性格の州であったのかわからないし、境界も不明である。いくつ州が存在したかも正確にはわからない。

十六世紀の政治組織はランダの時代から考察されてきた。各州についての記述はばらばらであり、いくつもの矛盾がある。また戦争や同盟や条約などで、各州の境界は一定ではない。各政治組織の違いによっても境界は曖昧さを増す。集権的な組織では境界がはっきりするが、ゆるやかな結合体では曖昧になるのである。

一六一六年、フエンサリダとオルビータがタヤサルに布教に赴いたことは、すでに第一章で述べた。数々の征服の試みのあと、一六九七年になって、やっと、タヤサルがスペイン人の手に落ち、マヤの征服は完了したのであった。